

# 平野廃寺

## 発掘調査報告書



2018

姫路市教育委員会

# 第1章 調査の経緯

## 第1節 調査に至る経緯

平成29年（2017年）に姫路市北平野五丁目899番1、900番1において、宅地の造成（対象面積約844.87m<sup>2</sup>）が計画された（図2）。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である平野廃寺（県遺跡番号020190）に該当する（図1）。事業者より文化財保護法第93条に基づく届出が提出されたため、姫路市教育委員会生涯学習部文化財課において遺跡の取り扱いについての協議が行われた。そこで、まずは事業地内の遺跡の状況を把握するために確認調査を実施した（遺跡調査番号20160572、図3・4）。調査の結果、設定した5箇所すべての調査区において地山を確認するとともに、そのうち2箇所ではピットや溝等の遺構を検出し、わずかではあるが遺物も出土した。

事業地内に遺跡が存在することが判明したため、兵庫県教育委員会からの発掘調査の通知に基づき、工事の掘削により遺跡に影響を及ぼす擁壁や地中埋設物の範囲を本発掘調査の対象とした。調査に際して、姫路市と事業者で委託契約を締結し、姫路市埋蔵文化財センターが現地調査や整理作業等を実施した（遺跡調査番号20170036）。

本発掘調査・整理作業の体制は以下のとおりである。

### 姫路市教育委員会事務局

教育長 中杉 隆夫  
教育次長 名村 哲也  
生涯学習部長 岡田 俊勝  
文化財課長 花幡 和宏  
課長補佐 大谷 輝彦（調整）  
技 師 黒田 祐介（調整）

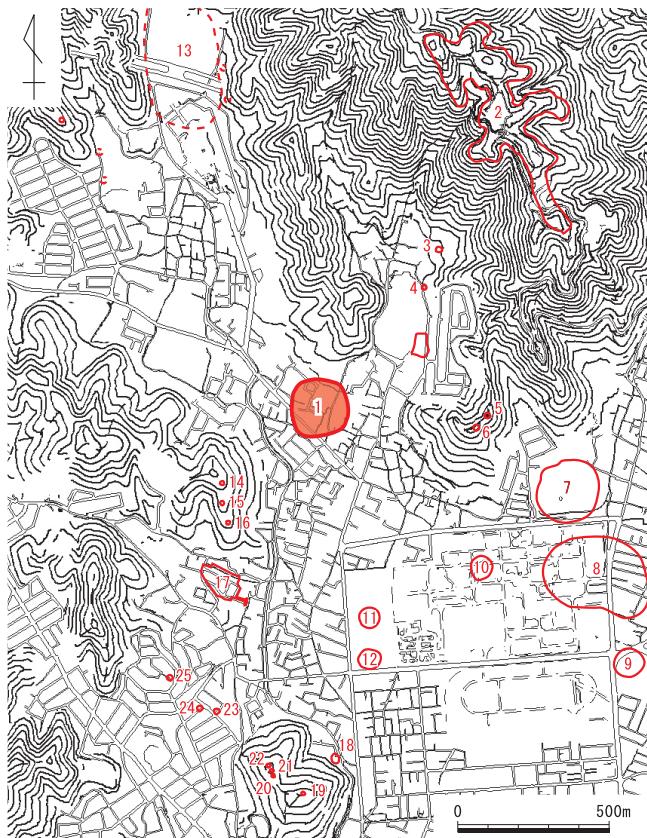
### 姫路市埋蔵文化財センター

館 長 前田 光則  
課長補佐 岡崎 政俊（庶務）  
主 事 岡本 武平（庶務）  
係 長 森 恒裕（調整）  
技術主任 福井 優（調査）

## 第2節 本発掘調査

本発掘調査の対象面積は81.2m<sup>2</sup>である。調査区は南北方向に長い部分が3箇所あり、それらを結ぶ東西方向の短い箇所からなる。調査時には、南北に長い調査区について西から西区・中区・東区と呼称した（図4）。本報告においても便宜的にその呼称を使用することにする。

調査は平成29年（2017年）4月25日に開始した。耕作土と床土（土壤化層）および性格の不明な堆積層については主に重機による掘削を行い、遺物の採集に努めた。それより下位で確認した地山の上面では人力による精査を行った。検出した遺構の調査を進めながら、同年5月8日に現地調査を完了した。現地調査終了後は、姫路市埋蔵文化財センターにおいて出土品などの整理作業を行い、本報告書刊行をもって一連の調査を終了した。



1. 平野廃寺
2. 広峰山城跡
3. 御奥塚古墳
4. 平野古墳
5. 平野ハス池頂上2号墳
6. 平野ハス池頂上1号墳
7. 白国廃寺
8. 桑の木遺跡
9. 白国平塚遺跡
10. 人見塚古墳
11. 峰南平塚古墳
12. 仏正田遺跡
13. 上大野群集墳
14. 平野1号墳
15. 平野2号墳
16. 平野3号墳
17. 梅ヶ谷町・行部遺跡
18. 元江尻病院裏遺跡
19. 八代山古墳群1号墳
20. 八代山古墳2号墳
21. 八代山古墳3号墳
22. 八代山古墳4号墳
23. 八代古墳群1号墳
24. 八代古墳群2号墳
25. 八代古墳群3号墳

図1 調査地周辺の遺跡 (S=1/25,000)



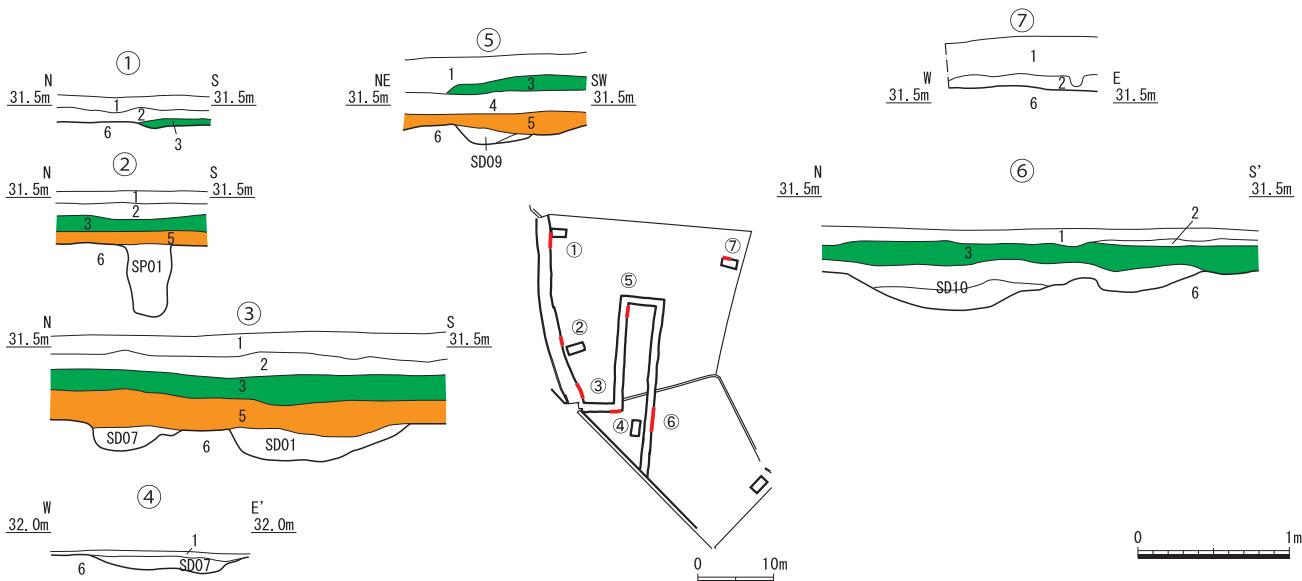
図2 調査地の位置 (S=1/3,000)

## 第2章 調査の成果

### 第1節 基本土層

事業地の現況は耕作地である。土地条件図等の地形図からは、調査地周辺は広峰山南麓に広がる埋没扇状地の扇端に当たるという。現在、周囲は宅地化がかなり進行しているものの、現況も緩やかな傾斜をみせており、旧地形の影響を少なからず受けていると思われる。

図3は事業地内における土層の柱状図である。基本的な土層として、上から耕作土（1層）、床土となった土壤化層（2層）、地山（6層）を確認した。このうち、今回確認した地山（6層）の標高は、北東端の⑦で31.6m、北西端の①で31.4m、その南の②で31.2m、③で31.0m、南端付近の④⑥ではそれぞれ30.5m、31.0mと概ね北から南に向けて緩やかに傾斜していた。また、地山（6層）の低位部には3～5層が広く堆積していた。この土層は、基本的に灰色系5Y5/1～7.5Y4/1を呈する比較的均質な粘質土で、遺物は出土しなかった。このような土性に加えて、調査地周辺の地形や古くから開墾されていたという土地利用を勘案すると、本来は地山の上面であったが、後世の耕作によって土壤化が進行した可能性を指摘できる。今回調査した遺構は全て3～5層直下で検出できたこととも整合が取れる。



1. 耕土 2. 灰黄褐色10YR5/2粘土【土壤化層】 3. 灰色5Y5/1シルト…しまりやや弱い、細～やや粗砂混じり、マンガンが斑状に沈着【地山の土壤化層】
4. 灰色7.5Y4/1シルト…色調以外は3層に近い【地山の土壤化層】 5. 灰色7.5Y4/1シルト…しまりやや強い、比較的均質。【地山の土壤化層】
6. 浅黄橙色10YR8/3粘土…しまり極めて強い、偽礫含む【地山、風化岩盤】

図3 調査地土層断面図 (S=1/50)

### 第2節 遺構

今回の調査で検出した遺構は、土坑3基、ピット27基、溝16条である（図4）。このうち、遺物が出土したり、他の遺構との有機的な関連が看取できたりしたものについては番号を付し、詳述することにする。なお、遺構の番号については、調査時のものを基本としている。

#### 1 土坑

西区で2基、東区で1基確認した。埋土は次に述べるピットと類似するが、遺物は出土しておらず、詳細な時期や性格は不明である。

#### 2 ピット

西区と中区で検出した。このうち、西区のピットは点在していた一方、中区のピットのなかには有機的な関連を伺わせるものがあった（写真図版1-2）。SP26-02-04-05、SP31-25-01、SP23-15-24の3列である。SP26-02-04-05では、SP05を除く全てが径約26cm、深さは15～25cmであった。また、柱間はSP26-02間で約2.1m、SP02-04間で約2m、SP04-05間で約2.6mを測る。最後の柱間が少し広い点が気になるものの、概ね一直線上に並んでいるために今回の調査では一連のものと判断した。このうち、SP02からは12世紀から13世紀にかけての須恵器碗と土師器皿が出土した（写真図版1-3）。次に、SP31-25-01についてみると、径はSP31とSP25は約23cm、SP01が約30cm、深さはSP31が約20cm、SP25が約15cm、SP01が約23cmであった。それぞれの柱間は、SP31-25間で約1.4m、SP25-01間で約1.6mを測る。柱穴の径、間

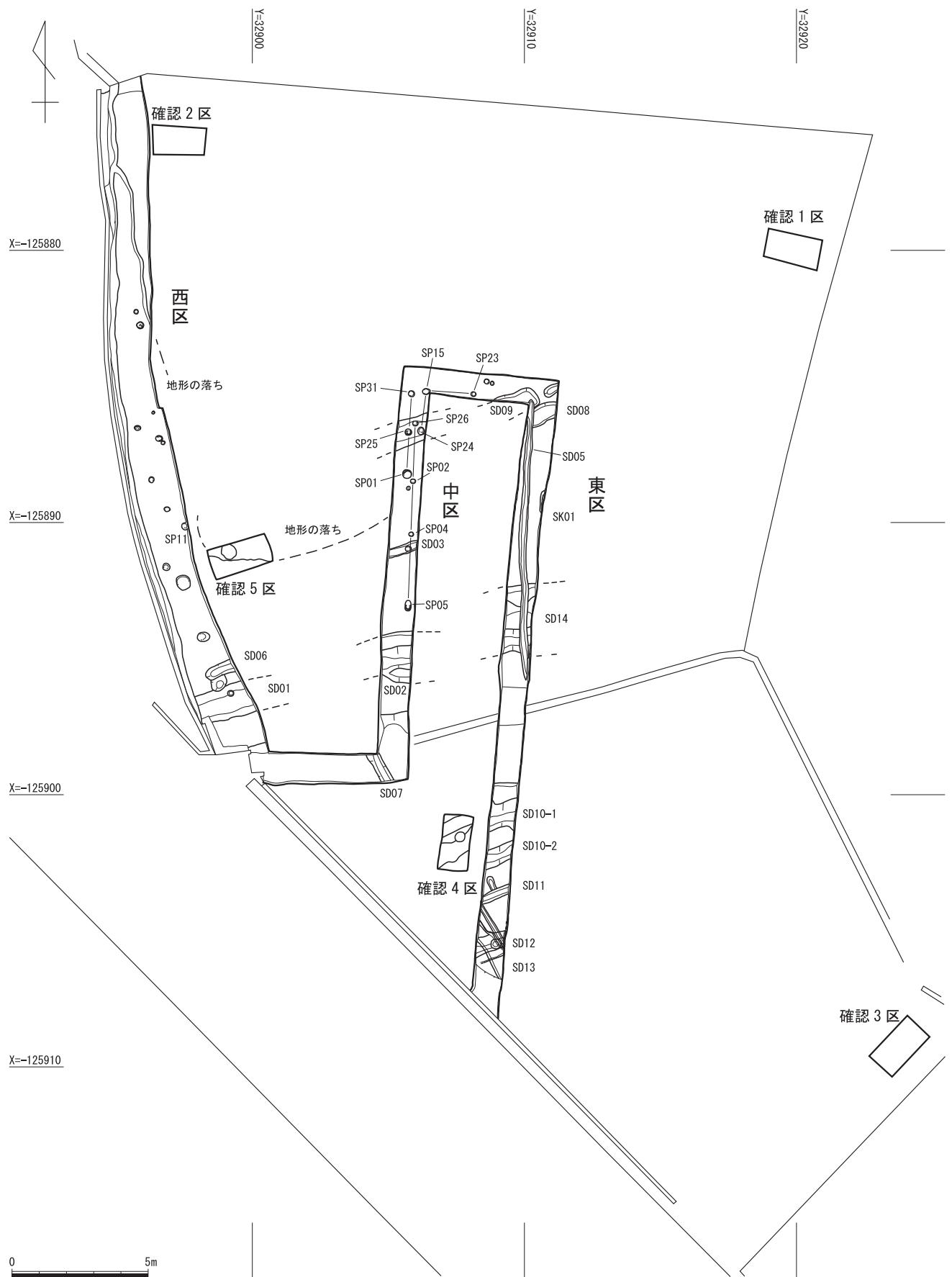


図4 調査区全体図 (S=1/200)

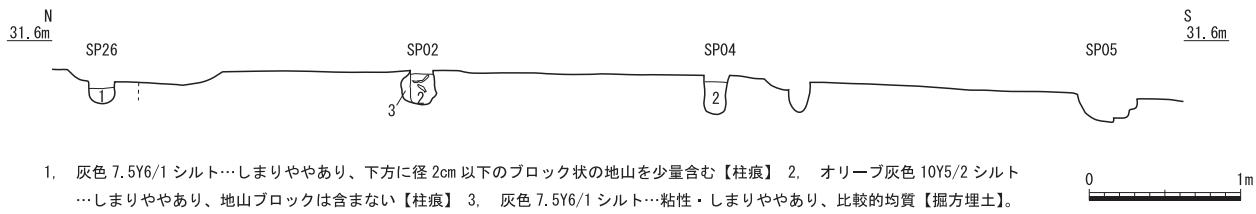


図5 SP26-SP02-SP04-SP05断面図 (S=1/50)

隔はともに先にみた SP26-02-04-05 よりも一回り小規模である。いずれの埋土からも遺物は出土しなかったために、時期は不明である。最後に SP23-15-24 であるが、SP23 は径約 20cm の平面円形であるのに対し、SP15・24 は長辺 25～30cm、短辺約 22cm の平面橢円形を呈していた。柱間の距離については、SP23-15 間で約 1.8m、SP15-24 間で約 1.5m を測る。柱間の距離が一定でない点で、なお注意を要するが、現地での観察では関連を疑わなかった。これらのピットからも時期を特定できる遺物は出土しなかった。なお、SP26-02-04-05 と SP31-25-01 については、調査区幅が狭小であったことから掘立柱建物であったのか柵状の遺構を構成するのか不明であるが、SP23-15-24 については掘立柱建物である可能性が高い。また、これらの長軸の方位についてみると、SP26-02-04-05 は N-4° -E、SP31-25-01 は N-2° -E、SP23-15-24 は N-7° -E で、概ね座標北を志向していると思われる。

今回の調査で検出したピットの埋土には、オリーブ灰色 10Y5/2 系と灰色 7.5Y6/1 系の 2 種類があった。しかし、SP26-02-04-05 のように一連と思われるピット列のなかでも両者が混在しており、同時期における性格の違いを示すものではない可能性が高い。また、ピット内からは遺物がほとんど出土しなかったこともあり、通時的な差異を反映しているかどうかについては不明といわざるをえない。これらの点から、今回検出したピット埋土の色調の差異の原因については今後の課題としたい。

### 3 溝

今回の調査で最も多く検出した遺構である。このうち、西区 SD01、中区 SD02、東区 SD14 はそれぞれの位置関係から一連の遺構と思われる。SD01 は幅約 1.2m、深さ約 20cm、SD02 は最大幅約 3.1m のうち、主体となる流路幅は約 1.9m、深さ約 35cm を測る。SD14 は搅乱を受けているが、最大幅 3.8m 程度、うち主体となる流路幅は約 1m、深さは約 45cm である。また、底面の標高は SD01 が約 30.8m、SD02 が約 31.3m、SD14 が約 31m であることから、北東から南西方向に走行していた可能性が高い。また埋土の観察から最終的には洪水によって一気に埋没したと思われる。埋土からは土師器壺、瓦質土器羽釜、東播系須恵器擂鉢、須恵質焼成の平瓦などが出土しており、その年代観から 14 世紀に埋没したと考えられる。

これ以外に代表的な溝として、東区で検出した SD05 と SD10 が挙げられる。SD05 は幅約 20cm、深さ約 5cm が残存するにとどまるが、先にみたピット列と平行しており、何らかの関連が想定できる。しかし、遺物は出土していないため時期については不明といわざるをえない。土壤化した埋土であったことから、しばらく湿地状を呈していたと考えられ、流路内に中洲状の高まりを有する。また、遺構の切り合い関係から、SD14 よりも新しい時期の遺構であることを確認することができた。SD10 は調査区内でも低位部で検出した。幅は約 2.8m、深さは約 30cm である。SD10 の埋土もレンズ状堆積を含む粗砂であることから、SD01-02-14 と同様、洪水によって埋没したと考えられる。遺物のうち、8 世紀代の須恵器長頸壺と甕については、今回の出土遺物の中では最も古く、平野廃寺が機能していた時期に近いものであるといえる。

### 第3節 遺物

今回の調査ではコンテナ（天昇電気工業製テンバコ P18、約 18 リッター）に 3 箱分の遺物が出土した。大半は磨滅した土師器や須恵器片であったが、SP02（図 6-1・2）、SD01（図 6-3～6）、SD14（図 6-7）、SD10（図 6-8・9）からは比較的まとまった遺物が出土した（図 6、写真図版 2-1）。1 は東播系須恵器碗である。見込み部にくぼみを持ち、平高台の底部には回転糸切りの痕跡がわずかに残る。高台側面には調整はみられない。碗部の下半は丸みを帯びている。これらの特徴から 11 世紀後半に位置付けられる。2 は土師器皿である。ロクロ成形で、底部にはヘラ切りの痕跡が残る。12～13 世紀に位置付けられる。3 は土師器鍋で、口縁端部は折り曲げて玉縁状を呈し、肩部の張出しが緩やかである。外面には平行タタキがみられる。これは、兵庫県内陸部で通有のタイプで 14 世紀代に比定されている（宮原 1992）。4 は東播系擂鉢である。5・6 は須恵質焼成の平瓦である。いずれも凹面には布目が残存する。5 の凸面には斜格子タタキが残る。側面をヘラケズリ後、凹・凸面にもヘラケズリを施す。6 の凸面には縄目タタキが残る。側面は凹・凸両面側にヘラケズリを施すが、凸面側がやや強い。7 は東播系擂鉢で、外傾する口縁端部を有する。12 世紀前半に位置付けられる。8 は須恵器甕である。

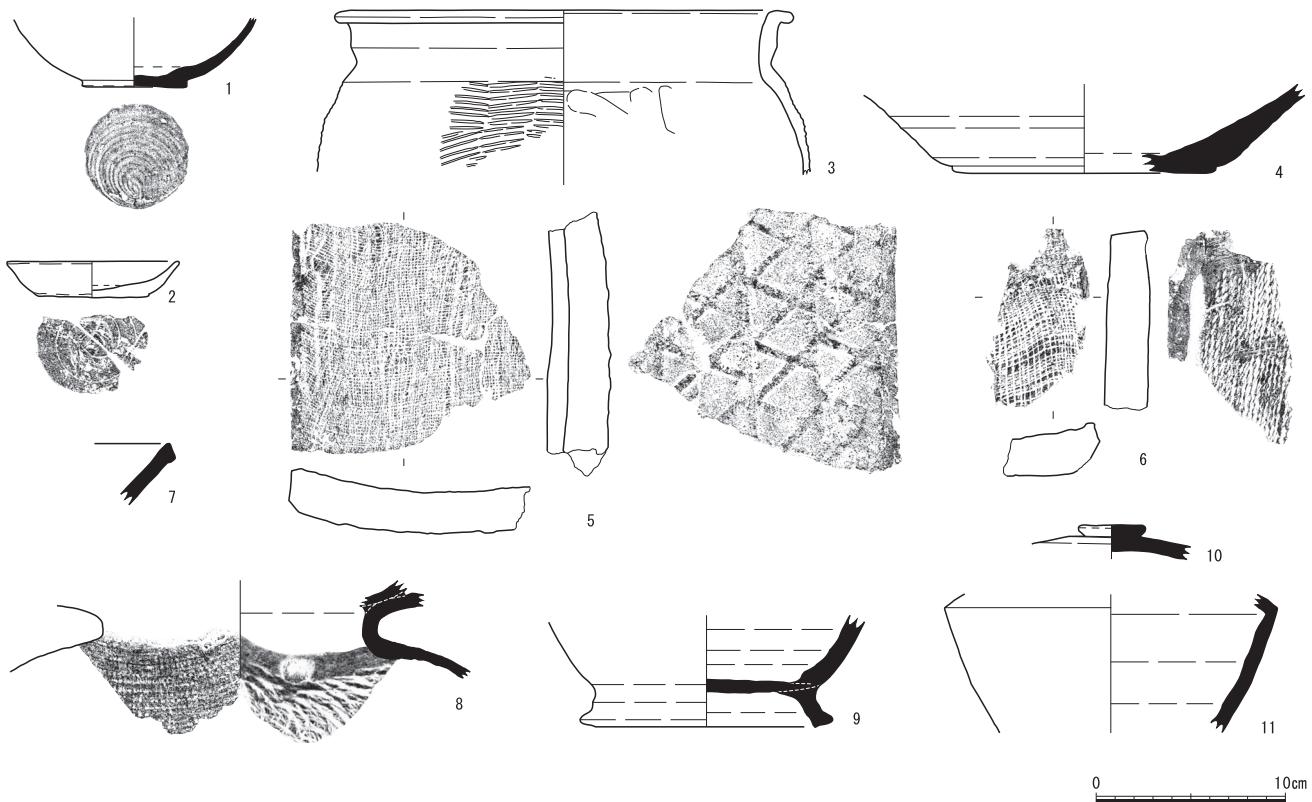


図6 出土遺物 (S=1/4)

口縁部内面には焼成時の融着がみられる。外面には格子タタキ、内面には青海波文がみえる。8世紀前半に位置付けられる。9は須恵器長頸壺である。詳細は不明であるが、8世紀代として大過はないと思われる。10・11は確認調査4区の溝出土の須恵器である。10は杯蓋でつまみの形状から8世紀後半に位置付けられる。11は長頸壺で、肩部の張り具合から8世紀の前葉から中頃に比定できる。

### 第3章 調査の成果

今回調査した遺構のほとんどは平野廃寺廃絶後のものであったが、SD10から出土した須恵器が当寺が機能していたとされる8世紀代のものであったことは最大の成果であるといえる。同時期の遺物は平野廃寺で実施してきた既往の調査では、おそらくは初めての出土であると思われる。

### 第4章 平野廃寺について

平野廃寺は長らく詳細不明の寺院とされ、その存在すら疑われるような状況であった。開発等にともなって確認調査も実施されてきたが、多くは既に遺構面の削平を受けているものと判断された。今回の調査において、低位部で当該期の遺構・遺物を初めて確認できたことは大きな成果といえる。

最後に、平野廃寺に関する唯一の先行研究である鎌谷木三次氏の研究（鎌谷 1942, pp. 219-223）を紹介しておきたい。鎌谷氏によると、1940年代には当該地周辺は既に宅地や耕作地として利用されており、廃寺を偲ぶ遺構の多くは既に失われていたようである。しかし、今回の調査地から北東約100m付近にある民家脇の法面には厚さ30～40cmの古瓦の包含層が地山直上に堆積していたという。また、詳細な地点は不明であるが、1890年代には心礎と思われる大型の石材が掘り出され、いざこへか運び出されたとの証言を参考に、塔跡の存在を想定している。なお、この石材については、姫路市地内町に所在する姫路船場別院本徳寺の一角に平野廃寺出土とされる礎石があり、関連が注目される（写真図版2-2）。また、これとは別の地点の民家の敷地内にも大型礎石が存在し、付近の小川にも移動されたものがあったという。現在でもその一部が、常称寺南東に保存されている（写真図版2-3）。既にその姿を失い、人々から忘れられつつある平野廃寺ではあるが、残された僅かな痕跡については、今後、保護顕彰に努め、次の世代へとつないでいきたい。

【引用・参考文献】鎌谷木三次 1942『播磨上代寺院址の研究』成武堂、宮原文隆 1992『門前・上山遺跡』中町教育委員会、森田稔 1986「東播系須恵器生産の成立と展開 - 神出古窯址群を中心に - 」神戸市立博物館編『神戸市立博物館 研究紀要』第3号 (財)神戸市スポーツ教育公社



1. 西区全景（北から）



3. SP02遺物 (II) 出土状況 (西から)



4. SD14-2-1 (東から)



2. 中区ピット群検出状況 (北から)



5. SD02断面

写真図版1 遺構



写真図版2 その他の写真

報告書抄録							
ふりがな	ひらのはいじ はっくつちょうさほうこくしょ						
書名	平野廃寺 発掘調査報告書						
シリーズ名	姫路市埋蔵文化財センター調査報告						
シリーズ番号	第63集						
編著者名	福井 優						
編集機関	姫路市埋蔵文化財センター						
所在地	〒671-0246 兵庫県姫路市四郷町坂元 414番地1 TEL (079) 252-3950						
発行年月日	平成30年(2018年)3月31日						
所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ひらのはいじ 平野廃寺	ひょうごけんひめじし 兵庫県姫路市 きたひらの 北平野五丁目 899番1・900番1	市町村 28201	020190	36° 00' 13"	139° 49' 54"	2017.4.25 ~ 2017.5.8	81m <sup>2</sup> 宅地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			遺跡調査番号
平野廃寺	社寺跡	奈良時代 平安時代	柱穴・溝	須恵器・土師器・瓦			20170036

#### 例言

1. 本書は、姫路市北平野に所在する平野廃寺（県遺跡番号 020190）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、姫路市北平野 899 番 1・900 番 1 における宅地造成工事に伴い、有限会社ハウスらんどと委託契約を締結し、姫路市埋蔵文化財センターが実施した。現地での発掘調査は、姫路市埋蔵文化財センター・福井 優が担当した。
3. 発掘調査と報告書作成の費用は、有限会社ハウスらんどの負担による。
4. 発掘調査は、平成 29 年 4 月 25 日から同年 5 月 8 日にかけて実施した。調査面積は 81 m<sup>2</sup>である。
5. 本書の編集・執筆および遺構・遺物の写真撮影は福井が行った。
6. 本報告にかわるる調査の記録・出土遺物などは、すべて姫路市埋蔵文化財センターで保管している。
7. 発掘調査・報告書作成に際して、下記の方々にご援助を頂きました。記して感謝申し上げます。  
(敬称略)

有限会社ハウスらんど 伊達敏行

#### 凡例

1. 発掘調査で行った測量は、世界測地系（測地成果 2000）に準拠する平面図直角座標系第 V 系を基準とし、数値は m 単位で表示している。
2. 本書で用いる標高は東京湾平均海面（T.P.）を基準とし、使用する方位は世界測地系の座標北である。
3. 本書に掲載した地形図は、姫路市基本地形図を使用した。
4. 遺構の略称は、以下のように呼称している。SP：柱穴・小穴、SD：溝
5. 遺構・土層等の呼称は、整理に際して変更したものもある。
6. 土層の色調は、小山正忠・竹原秀雄編 2003『新版 標準土色帳 25 版』日本色研事業株式会社に準拠した。

姫路市埋蔵文化財センター調査報告 第63集

#### 平野廃寺 発掘調査報告書

編集 姫路市埋蔵文化財センター

〒671-0246 兵庫県姫路市四郷町坂元 414番地1

発行 姫路市教育委員会

〒670-8501 兵庫県姫路市安田四丁目1番地

発行日 平成30年(2018年)3月31日

印刷・製本 内海印刷株式会社

〒670-0808 兵庫県姫路市白国五丁目12-41